

## 桜石



第4展示室に入ってまっすぐ進むと、左に今吉鉱物標本のコーナーがあります。中ほどに、小ぶりですがきれいに花びらが6枚分かれたような石があります。これは桜の花びらのようにも見えるので「桜石」と呼ばれます。自然が作りだした驚くべきこの柄は、どのようにできたのでしょうか。

中生代白亜紀(約9300万年前)に地中深くから上昇した花崗岩質のマグマによって、もともと存在していた泥岩が熱変成作用を受けた時に、インド石と呼ばれる鉱物を中心に堇青石の結晶が花卉状に成長しました。その後の変質作用で堇青石の結晶が白雲母に置き換わったのが桜石です。その際、微量の酸化鉄(鉄さび)が加わることで、ほんのりピンクに色づくこともあります。本来、白雲母の結晶だけでは六角形にはなりません、インド石や堇青石の結晶から置き換わったために桜の花が開いたような形を受け継いでいます。このような結晶を「仮晶」といいます。

桜石は日本地質学会が定めた京都府の「県の石」の鉱物としても選ばれていて、京都府亀岡市の「市の石」としても2017年に指定されました。亀岡市<sup>ひえだの</sup>稗田野町で産出したものは特に美しく、国の天然記念物「稗田野の堇青石仮晶」に指定されています。

桜石が採取される京都府の亀岡市桜天神は、菅原道真ゆかりの神社とされています。菅原道真が太宰府へ左遷される際、別れを惜しんだ家臣へ桜の木を贈りました。その家臣が桜の木を育てつなぎ、のちに境内で桜の花の形をした石が産するようになった、と伝えられています。このようなエピソードがこのさされる桜石は、長い年月をかけて自然が作り出した偶然の産物です。

(地質標本館室 畑 香緒里)